

# 医療・現地報告

相田陽子（コロナダル駐在事務所スタッフ）

## <モンゴカヨから> 山頂の集落

6月27日巡回診療に同行し、チボリ町のモンゴカヨという集落へ行ってきました。主要道路から脇道へ入り1時間。バサグという集落で車を降りました。目指すのはあの木という目標の木は、はるかかなたの山の頂上にあります。

登り始めてしばらくして暗くなり、足元は全然見えません。CMBの事務所でボランティアとして働いているロレットが手を繋いでくれて、一緒に登りました。前日からの雨で、ぬかるんでいて、すべって、何度も転びながらも、上へ上へと足を運びました。それでも虫が飛び交う中、暗いながらも、山々の輪郭が見え、大自然の中にいる心地良さは、苦労を半減させてくれます。目標の木とっていると、違う木で、まだ先があり、決して到着しないように思えました。着いたら夕食など食わずに、すぐ寝たいと思っていましたが、スタッフハウスに着くと、チボリダンスの出迎えに、私も踊りたくなり、疲れはどこかへ行ってしまうました。音楽の効用を再認識しました。

スタッフハウスからは、ジェネラルサントスの町の明かりが見下ろせます。翌朝起きると、サランガニ湾も小さく見えます。本当に高い所へやってきたのだとわかります。このような高地へ住処を移さねばならなかった事情を考えると、胸が痛みます。今もほとんどチボリ民族だけの集落で、文化も伝統も手付かずに残っているということですが、それだけこの集落への往来が簡単ではないことを示しています。

## 巡回診療

今回は、開業内科医のカガピ先生と開業歯科医マドリッドご夫妻(写真右)の担当です。又カガピ先生の奨学金で看護学を学んでいる男子2名、女子4名が助手として参加。学生たちが受付を担当し、名前と年齢を聞き、体温や血圧を測ってカードに記入し医師に診てもらいます。

一人結核の疑いのある女性がいました。集落担当のヘルスワーカーに伝え、検査して結核だとわかると、6ヶ月間の治療薬の無料支給の手続きをしてもらいます。結核は早期に発見、治療して、感染を防がなければなりません。しかし、集落の住民は、お医者さんに診てもらおうお金がないので、2年に一度程の無料巡回診療でしか、診断の機会がないのが現実です。



## モンゴカヨの子どもたち

私は子どもたちと遊ぶ機会がありました。新聞紙で作った風船を準備してきたので、それを投げ合いました。風船の原型を留めず、丸めた新聞紙になり、それがちぎれて、小さな紙切れになっても、投げては受け取りを繰り返します。私は疲れてやめたいと思ってもやめさせてくれません。

翌朝、子どもの一人が私に向かって「ビニビニ」という言葉を盛んに発します。何だろうと思案していましたが、フィリピン語で独身の女性や先生に対する呼称だと思い出しました。ただ一緒にボール(?)遊びをただけなのに、先生と知っているとは。こういう時に、いろいろな遊びを教えてあげられる、幼児教育専攻の人がいればと思いました。

モンゴカヨには小学校がないので、学校へ行くには、麓まで行かなければならないと知って驚きました。2時間もかかって登ってきた山道を、毎日行き来するとは。子どもたちの苦労は想像に絶します。

## 健康・衛生セミナー

ヘルス担当のジョジョとリジャの仕事は昼間のフリークリニックで終わりではありません。夜は健康・衛生に関するセミナーを行いました。女性は40名程、男性も15名程出席しました。

驚いたことに、翌朝、教会で、私の隣に座った壁際の女性が、1歳半位の子に壁に向かって用を足させようとしています。外でするように言おうと思いましたが、その女性が英語が分からなければ、誤解される可能性もあるだろうと、言わないでしまいました。子どもとはいえ、かなりの量で、その子どもの足を濡らし、後ろへ後ろへと流れていきます。やはり言うべきだったと後悔しました。後でジョジョに話すと「衛生セミナーをしても何の意味もない」と嘆きました。衛生知識を持ち、実行してもらうには、時間をかけていくしかないようです。